

九州の大学生におけるアスペクト表現の実態

二階堂, 整
福岡女学院大学人文学部 : 教授

<https://doi.org/10.15017/4783569>

出版情報 : 語文研究. 130/131, pp.511-502, 2021-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

九州の大学生におけるアスペクト表現の実態

二階堂 整

1 はじめに

西日本では、アスペクト表現で継続相ヨル・結果相トル（チョル）の2区分がある。最近はこの対立が揺らぎ、ヨルの領域へトルが進出しているとされる（工藤2001等）。例えば、国語研の『日本のふるさとことば集成』18巻の大分県資料は、1978年に大分郡挾間町が調査されている。その解説の文法の項目（7）で、「進行態を表す「ヨル」と存続態を表す「チョル」が使い分けられる。両者がともに「チョル」で表される場合もある」（P98）とし、その例文として、「ア ハシッチョル（あ、走っている）＜進行＞」が、あげられている。また、『九州方言の基礎的研究』1969の広域調査項目「雨が降っている（進行態）」において、九州のほとんどは、ヨル形だが、福岡24地点中、老年・中学生とも同一の5地点はトル形併用（含チョル）の回答が示されている。このように、アスペクトのヨル・トル（チョル）の2つの区別が揺らいでいるとの報告は、かなり以前から示されているようである。

しかし、アスペクトの調査自体が容易ではなく、アンケートでは実態を示す回答が得にくく、そのため、アスペクト表現の具体的な状況の把握は難しい。さらに、福岡県・大分県は筆者の一連の談話調査からは、今もアスペクトのヨル・チョルの区別をよく保つ地域と思われるのである（後述）。

本稿では、いくつかの先行研究を踏まえた後に、九州各県の大学生の談話調査におけるアスペクト表現をみていく。その中で、県ごとに様相がかなり異なること、変化は、ヨルの領域へトルが進出するのではなく、一気に2つの区別がなくなり、テル形に移行していること、そして、そのきっかけは否定形がテナイ形に変わることにあるのではないかということを書いていく。

2 先行研究

まず、これまでのアスペクト表現に関する先行研究にふれ、福岡・大分のアスペクト表現を整理する。

2-1 科研アンケート調査 (工藤2001)

工藤2000、2001の科研研究では、全国統一調査票により、その土地出身の日本語学研究者が省内により回答した。併用も積極的に記入された。この中で、その調査結果からヨル・トル対立が失われ始めるとされた主体動作動詞の例をあげる (A・Bとも九州のみ 必要箇所のみ抜粋)。地点名の後は話者の年齢 (調査時) である。

A お父さんがビールを飲んでいる最中

B 「太郎は今ビールを飲んでいるところかと聞かれて」 いや、飲んでいない

| | | |
|------------|--------------|---------------------|
| 福岡県小郡市25歳 | A ノミヨル/?ノンドル | B ノミヨラン/?ノンドラン (まれ) |
| 福岡県北九州市45歳 | A ノミヨル/ノンドル | B ノミヨラン/ノンドラン |
| 福岡県宮田町45歳 | A ノミヨー/ノミヨル | B ノミヨラン |
| 福岡県久留米市47歳 | A ノミヨル | B ノミヨラン |
| 福岡県福岡市35歳 | A ノミヨー/ノンドー | B ノミヨラン/ノンドラン |
| 佐賀県佐賀市42歳 | A ノミヨッ/ノンドッ | B ノミヨラン/ノンドラン |
| 熊本県天草郡44歳 | A ノミヨル/ノンドル | B ノミヨラン/ノンドラン |
| 熊本県松橋町32歳 | A ノミヨル | B ノミヨラン |
| 大分県大分市41歳 | A ノミヨル | B ノミヨラン |
| 大分県竹田市26歳 | A ノミヨル | B ノミヨラン/ノンジョラン |

工藤2001では、九州のアスペクトにつき、次のまとめ (部分抜粋) をしている。

①「シヨル」と「シトル」のアスペクト対立がうしなわれつつある。「シヨル」形式の意味の方が「シトル」形式で表現されるようになっていき、逆の傾向はない。

②これは動詞のタイプからいうと、主体動作動詞 (非限界動詞) からはじまる。なお、すべての方言において、「思う」のような状態的な動詞では、基本的にシヨルとシトルのアスペクト対立はない (筆者注 いわゆる心理動詞は「思ットル」となる)

2-2 福岡談話調査 (二階堂2006)

二階堂2006は、福岡市の約1時間の談話調査 (自由会話) を3世代に実施し、

アスペクト表現を観察した。アンケートでは把握困難な、アスペクト表現の実態をさぐろうとしたものである。以下に若年層・中年層談話の例を示す。

I 談話 (20、21歳の女子大生)

ヨル形75 (否定1)・トル形88 (否定0)・テイル (テル) 形17 (否定13)

II 談話 (49歳と51歳の女性)

ヨル形44 (否定0)・トル形43 (否定0)・テイル (テル) 形10 (否定5)

福岡市談話では、ヨル・トル形がほぼ同数出現し、区別が保たれているようであった。

さらにI・IIとも否定形は、具体的にはほぼすべてがテナイ形であり、2-1の調査と異なる結果が現れた。また、心理動詞の中で比較的数の多い「思う」についてみると、I・II合算で、ヨル形5例、トル形3例、テイル (テル) 形1例であり、心理動詞「思う」はヨル・トルの両形が出現した。これも、2-1の調査結果まとめの②とは異なる点であった。

2-3 場面設定による調査 大分県・福岡県 (二階堂2015)

場面設定による談話調査を2009~2013年度にかけ、大分・福岡県で実施した。生え抜きの高年層 (7, 80代)・青年層 (2, 30代)・中学生の男女1名ずつに対し、それぞれの世代ごとにペアとなり、その場で、以下の場面設定で1, 2分程度の話をする (演じてもらう) 方式である。場面は、①朝、②夜、③道、④買物、⑤出がけ、⑥帰宅、⑦祝儀、⑧不祝儀、⑨自由会話 (⑨のみ10分程度) の9つで、例えば、道の設定は、道でばったり出会って立ち話をしてもらう方式である。高年層はすべての場面を実施、青年層は⑦⑧を除き実施、中学生は、⑤~⑧を除いて実施した。対象とした調査地域は、大分県の12地点と福岡県の3地点である。2-1の結果から、比較的区別が保たれているとされた大分県と、区別がゆらいでいるとされた福岡県を比較することもねらいである。

結果、中学生においても数の上でヨル形 (しかも現在形) がよく使用されていた。さらに、2-1の結果まとめで、変化 (ヨルからトルへ) が始まるとする主体動作動詞の「言う」ではヨル・トル (Chol) のそれぞれの数は、61・5、「飲む」では、3・7、「見る」は、6・6であり、2-1のまとめ①・②について、数の面からも、対立が失われつつあるとの指摘は疑問がでてくる。なお、テル・テナイは出現するが、テイル・テナイ形は全く出てこなかった。

中学生では、アスペクトの否定形において、ヨラン・トラン（チョラン）形を使用せずに、テナイ形（テネーが多数）を使用する傾向がうかがえた。これは、2-2の福岡の結果と重なる。2-1の研究者の内省による回答では全く出てこなかった現象である。これらの談話からは、ヨル・トルの区別は、区別が保たれているものの、否定形において、両者の区別が無くなり、テナイ（テネーも含む）に変化する動きが見てとれる。

さらに、心理動詞「思う」は、ヨル・トル（チョル）両形が出現（44・31）し、2-1の結果まとめ②と異なる部分が出てきた。

2-4 配慮表現談話調査 大分県（二階堂2018）

この調査は配慮表現の研究を目的としており、「体育祭の審判交代」「ゴミ当番の交代」「道での尋ね」の3つの場面設定の談話調査を老年層・大学生・中学生に対して実施したものである。調査地点は、大分県の大分市・竹田市・日田市の3か所である。場面設定の談話調査という内容を生かして、その資料からアスペクト表現を観察していった。

結果として、大分県3地点では、大きくは、ほぼ3世代とも、ヨル・チョルの区別を保っているといつてよい状態であった。先行研究の2-3同様、テル・テナイ形は全く出現しなかった。全体として、テル形の使用はほとんどなく、結果相の語形もトルでなく、チョルがよく使用されている。数から見て、上の世代ほど、アスペクト表現をよく使用するとの傾向はうかがえる。ただし、中学生は談話の時間自体が短いためか、大分市中学生では、チョルは出現したが、ヨルは結果として出てこなかった。

否定形は、否定形の数そのものが多くないため、使用する形式は、判断しかねるところである。

心理動詞については、数の多かった「思う」は、全体で20例、出現した。うち、ヨル形が9例、チョル形が8例、テル形が3例であった。2-2の結果と同様、心理動詞「思う」はやはり、ヨル・チョルの両方の形が使用されていると見ることができる。

ただ、新しい変化を予兆される動きが男子大学生の談話結果にみられた。大分市では、テル21例（大分市大学生男子アスペクト表現全33例中）が大学生男子に出現し、竹田市では、テルは1例だが、チョルでなく、トル7例（竹田市大学生男子アスペクト表現全22例中）が同じく男子大学生に出現、日田市では、トル3例・テル6例（日田市大学生男子アスペクト表現全14例中）が男子大学

生に出現している。いずれも、大きくは共通語へ向かおうとする変化であった。ここに2-2、2-3とは違った動きを見ることができる。3地点とも、男子大学生に、ヨル・トルの区別維持を越えて、(チョルでなく)トル、そしてテルへの動きが見られた。ただし、これらの男子大学生いずれも、少数ではあるが、ヨル・チョルを使用していることは注意する必要がある。2-3の先行研究では、青年層が調査対象であり、実際は地元の、20~30代の調査であった。この調査は、地元の同じ大学の学生同士の会話である点が異なる。その点から考えると、大分県の男子大学生の結果の、トルさらにテルの使用は、アスペクト表現に変化が起こりつつある予兆を示しているのではないかと思われた。

2-5 先行研究のまとめ

以上の2-1から2-4の先行研究結果をまとめると、まず、アンケート調査と談話調査では、結果が異なることがあげられる。目的も調査方法も同一ではないので、同様に扱うわけにはいかないが、相違点は注目する必要がある。

2-2, 3, 4の福岡県・大分県の談話調査によれば、この2県において、アスペクト表現のヨル・トル(チョル)の区別は3世代にわたり、比較的保たれていると思われる。テイル・テイナイは全くといってよいほど出現しない。一方、テルはあまり出現しないものの、アスペクト表現の否定形はほぼテナイの1つに偏る傾向があった。よって、ヨル・トルの区別の揺らぎは、ヨルの領域へトルが進出するのではなく、否定形テナイをきっかけとして、一気にテル形へと進んでいくのではないかと予想させる(後述)。

また、心理動詞では、トル(チョル)表現だけでなく、ヨルの使用が見られることが注目される。

3 本研究の調査概要

アスペクト調査では、アンケートによって、適切な結果を得ることが難しい。話者に調査の意図を理解して回答してもらうことが難しいためである。かといって、意図を説明しすぎると回答に影響を与えてしまう。そこで、なるべく自然な形で回答を得るために場面設定による談話調査を実施した。幸い、アスペクト表現はどの談話にも出やすく、ある程度の調査時間を確保すれば、おおよそその実態を探ることができる。

本研究では、最近のアスペクト表現の揺らぎ・変化をみるため、九州の大学生を対象とした。以下の場面設定で男女のペアが1, 2分程度の話をする(演じて

もらう)方式をとった。場面は、①朝、②夜、③道、④買物、⑤出がけ、⑥帰宅、⑦自由会話(自由会話のみ30分程度)の7つで、例えば、道の設定は、道でばったり出会って立ち話をしてもらう方式である。この方式は松田^(注1)によるもので、すでに実績もあり、先行研究結果とも比較できるため、同じ方法を用いた。

調査地域や話者は、沖縄を除く九州各県の大学生男女1名ずつである。ただし、諸事情により佐賀は未調査である。各県の調査地選定の条件は、その県の代表的方言地域出身とした。例えば、福岡県では、北九州市を中心とするいわゆる豊前方言地域は除外し、福岡市などの筑前方言地域や、久留米・大牟田の筑後方言地域とした。具体的な話者については、お世話になった各大学の先生に、条件に合う学生をまず選んでいただき、さらにその学生が一番話しやすい異性を選ぶ方式をとった。その際、上記の出身地の条件を守ってもらうことにしたが、学年はそろえなかった。よって、4年生のペアや3年生のペアが存在する。調査は2018年度、2019年度にかけて実施した。調査時は各大学を訪問、大学の構内の教室や研究室を利用させていただいた。場面設定の①朝、②夜、③道、④買物、⑤出がけ、⑥帰宅までは、筆者が立ち会い、説明しながら談話を収録した。その後の自由会話では何を話題にしてもいいこととして30分ほどのおしゃべりをしてもらうことにした。その際、筆者は調査場所を離れ、30分後に戻ってきて、調査終了とした。これにより、ある程度の量の資料を確保し、できるだけ自然な会話を収録することができたと思う。表1が県ごとの収録時間の結果であるが、おおよそ、どの県も一定以上の時間を確保したと考えている(福岡の朝の場面は諸事情により資料を欠く)。

表1 表示単位 分:秒(福岡の朝の場面は諸事情により資料なし)

| 設定場面 | 福岡 | 大分 | 長崎 | 宮崎 | 熊本 | 鹿児島 |
|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 道 | 1:43 | 3:08 | 0:50 | 1:27 | 0:56 | 1:26 |
| 朝 | - | 2:25 | 0:50 | 1:09 | 1:05 | 1:33 |
| 夜 | 1:25 | 2:08 | 1:25 | 1:16 | 1:18 | 1:45 |
| 買物 | 1:31 | 2:52 | 1:49 | 2:02 | 1:03 | 2:07 |
| 出がけ | 1:28 | 2:17 | 1:40 | 2:08 | 1:07 | 1:47 |
| 帰宅 | 1:16 | 2:16 | 2:02 | 1:29 | 1:15 | 1:52 |
| 自由会話 | 28:16 | 30:21 | 30:05 | 26:23 | 29:25 | 32:45 |
| 会話時間合計 | 35:39 | 45:27 | 38:41 | 35:54 | 36:09 | 43:15 |

4 考察

4-1 九州の大学生の各県別アスペクト表現

表2はアスペクト表現を県別・語形別にまとめ、集計したものである。場面により出現数に特定の偏りなどがなかったため、6つの場面を1つにまとめ、自由会話は別にまとめ、その上で、県別総合計を出した。横軸の語形は、一番左のヨルが方言進行相、トルからチョルまでが、方言結果相である。大分・宮崎では、トルがチョルになる。共通語系の語形として、テル・テイルを置いた。()は否定形の数を示す。先行研究の2-2, 2-3で触れたように、福岡・大分の否定形は、ヨラン・トラン(チョラン)にならずにテナイに変化している結果を踏まえてのことである。これについては、後述する。縦軸は、上に行くほど、区別を保つと思われる県を並べた。

まず、同じ九州の大学生の談話にもかかわらず、そのアスペクト表現にかなりの違いがあることが明らかになった。福岡は、数と割合からも、アスペクトの区別がよく保たれているといってよい。なんといっても進行相のヨルの使用が多い点がそれを示している。アスペクトの区別が揺らぐ際、ヨルの領域へト

表2 県別・語彙別 アスペクト表現分布表 ()は否定形の数 空欄は0を意味する

| | ヨル (ヨラン) | トル (トラン) | チョル (チョラン) | テル (テナイ) | テイル (テイナイ) | 合計 |
|------------|-------------|-------------|---------------|----------------|---------------|------------|
| 福岡 | | | | | | |
| 場面設定 | 9 52.9% | 3 17.6% | | 5 (5) 29.4% | | 17 100.0% |
| 自由会話 | 42 44.2% | 32 33.7% | | 21 (13) 22.1% | | 95 100.0% |
| 合計 | 51 45.5% | 35 31.3% | | 26 (18) 23.2% | | 112 100.0% |
| 大分 | | | | | | |
| 場面設定 | 11 36.7% | | 11 36.7% | 8 (3) 26.7% | | 30 100.0% |
| 自由会話 | 25 24.0% | 4 3.8% | 27 26.0% | 48 (10) 46.2% | | 104 100.0% |
| 合計 | 36 26.9% | 4 3.0% | 38 28.4% | 56 (13) 41.8% | | 134 100.0% |
| 長崎 | | | | | | |
| 場面設定 | 2 10.0% | 8 40.0% | | 10 (5) 50.0% | | 20 100.0% |
| 自由会話 | 8 13.1% | 8 13.1% | | 45 (3) 73.8% | | 61 100.0% |
| 合計 | 10 12.3% | 16 19.8% | | 55 (8) 67.9% | | 81 100.0% |
| 宮崎 | | | | | | |
| 場面設定 | 1 7.7% | | 2 (1) 15.4% | 10 (4) 76.9% | | 13 100.0% |
| 自由会話 | 10 12.2% | 4 (1) 4.9% | 8 9.8% | 60 (6) 73.2% | | 82 100.0% |
| 合計 | 11 11.6% | 4 (1) 4.2% | 10 (1) 10.5% | 70 (10) 73.7% | | 95 100.0% |
| 熊本 | | | | | | |
| 場面設定 | 1 11.1% | 3 33.3% | | 5 (1) 55.6% | | 9 100.0% |
| 自由会話 | 6 5.8% | 18 17.5% | | 79 (31) 76.7% | | 103 100.0% |
| 合計 | 7 6.3% | 21 18.8% | | 84 (32) 75.0% | | 112 100.0% |
| 鹿児島 | | | | | | |
| 場面設定 | | 1 3.8% | | 25 (5) 96.2% | | 26 100.0% |
| 自由会話 | | 1 0.9% | | 109 (11) 98.2% | 1 0.9% | 111 100.0% |
| 合計 | | 2 1.5% | | 134 (16) 97.8% | 1 0.7% | 137 100.0% |

ルが進出するとされているが、福岡では語数の半数近くがヨルであり、その点からも区別が安定していると判断される。また、一見、テルの割合が23%と多いように思えるが、26語のうち、18語が否定形のテナイであり、これは説明がつく（後述）。大分も、区別をよく保ち、トルではなく、地元方言の Chol 形が出現している点は伝統を引き継いでいるとうかがえるが、テルの使用、それも否定形でないものの数が多い点から、2番目に置いた。

この2県の次の段階が長崎である。ヨル・トルの使用数や比率はかなり下がるが、宮崎よりは、ヨル・トルの使用率（トルは宮崎のトル・Chol 合計より率が高い）が高いことと、テルの使用率が宮崎より低い（しかも否定形の数も宮崎より多い）点に着目して3番目とした。宮崎は第4位である。長崎と近い比率を示すものの、方言形のどの項目も長崎より低く、さらにテル形の使用が多いのが問題である。熊本はトルの使用率は高いものの、ヨルの比率があまりにも低く、5番目とした。問題は6番目の鹿児島である。ヨルが皆無、トルもごくわずかで、圧倒的にテルが多い。さらに、否定形テナイが必ずしも多くを占めているわけではない。ヨル・トルの区別どころか、伝統的な方言形ヨル・トルが壊滅状態である。確かに調査中、横で聞いていても、また文字化資料を見直してみても、全体的に鹿児島他の方言形の出現が非常に少なかった。福岡や大分は、地元の他の方言形が頻出する。長崎などもしばしば聞かれる。どうも鹿児島は、この調査に見る限り、他の九州の県と異なり、大学生の方言の使用が急速に減少しているのではないかと思われる。

否定形は九州の6県すべて、ほぼテナイの1つになる結果となった。ヨル・トル区別の揺らぎは、実際はこのテナイから起こるのではないだろうか。トルがヨル領域へ進出する変化ではなく、まず、一気に否定形がテナイに変わり、それに引きずられて、ヨル・トルが区別を無くし、テルへと変化していくことが予想される。

なお、心理動詞は本調査では、出現数そのものが少なく、はっきりしたことは言えなかった。

4-2 アスペクト表現の揺れについて

九州の大学生におけるアスペクト表現の実態を4-1で述べてきた。全体として、ヨル形・トル形の使い分けは揺らぎつつある点も見受けられるという状態かと思われる。ただ、その状況は各県ごとにより異なる。鹿児島県のように、テル形へ進んでしまっている地域もあれば、九州の経済・文化の中心地で

ありながら、ヨル形・トル形の使い分けを比較的よく保つ福岡県があるなど、様々である。この状況を考えれば、西日本のほか地域でも、ヨル形・トル形の使い分けは揺らぎつつある地域があっても、その状況は一律でなく、地域によって様々であることを予想させる。また今回の調査資料からは、ヨル形の領域にトル形が侵入するという変化ではなく、一気にテル形へと進む過程が見てとれた。それも否定形がテナイに変化することを最初の段階とするようである。

こうした現象（否定形でテナイ使用）の原因としては、否定の場面においては、否定であるからこそ、ヨル・トルの区別が重要でなくなるということがあり得ると思われる。現実を考えると、否定形においては、ヨラン・トランの区別はあまり重要でなくなる。「残したケーキを食べていないか」と尋ねられ、「食べトランけど、今、食べヨルよ。残念でした」などと答える特殊な場合ならともかく、通常は否定をしてしまえば、ヨル・トルの区別は重要ではなくなる。繰り返しになるが、アスペクト表現のヨル・トルの区別の揺らぎは、ヨル領域にトルが進出するのでなく、共通語の影響を受け、まず一気に否定形をすべて、テナイにする形で進み、それをきっかけに、ヨル・トル区別が薄れ、テル形に進んでいくのではないだろうか。ヨル領域にトルが進出する現象が皆無とはいわないが、あったとしても短い時間の幅の変化ではないかと、一連の調査結果から推測する。

談話調査からは、もう1点、明らかになったことがある。工藤2001のまとめ②で、「[思う]のような状態的な動詞では、基本的にシヨルとシトルのアスペクト対立はない」とされたが、今回の一連の談話調査では、心理動詞にヨル形がつく例が出現した。これは、現実の用法を示しているのではないと思われる。談話調査では、状態的な動詞の心理動詞（「思う」「考える」など）に「ヨル」の用法が多数見られた。特に「思う」は、トル形もちろんあるが、ヨル形もかなりの数が出現した。2-2の福岡調査では、ヨル形5例、トル形3例、テル形（テル）1例、2-3の福岡・大分調査では、ヨル・トル（ Chol ）両形が出現（44対31）、2-4の大分調査では、「思う」は、全体で20例、出現し、ヨル形が9例、 Chol 形が8例、テル形が3例であった。こうしてみると、何か特殊な条件の時だけ心理動詞にヨルがつくといい状況ではなく、実際は心理動詞にもヨルが普通に用いられると考える方が自然かと思われる。

5 おわりに

以上、九州の大学生におけるアスペクト表現の実態について述べてきた。た

しかに現在はヨル形・トル形の使い分けは揺らぎつつあるという状態かと思われる。ただ、九州内でもその状況は様々であり、一括りにはできない。

今後は、実施できなかった佐賀調査を行うこと、そして、古い場面設定談話の調査資料が残る大分県(注2)の分析を進めていきたいと考えている。

(注1・2) 松田正義1960『方言生活の実態』明治書院

主要参考文献

- 九州方言学会編1969『九州方言の基礎的研究』風間書房
工藤真由美1995『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
工藤真由美2000科研報告書『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究1』
工藤真由美2001科研報告書『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究2』
工藤真由美2002科研報告書『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究1』
工藤真由美2003科研報告書『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究2』
工藤真由美2004『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系』ひつじ書房
工藤真由美2014『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房
国立国語研究所編2008『日本のふるさとことば集成』18(福岡・大分・宮崎)
二階堂整2004 科研報告書『地域方言の談話アスペクトにおける「話者認知スケール」に関する記述的・理論的研究』
二階堂整2006「談話資料からみた福岡方言のアスペクトの実態」『語文研究』100・101号 九州大学国語国文学会
二階堂整2015「談話調査の有効性——場面設定におけるアスペクト表現——」日本方言研究会第100回研究発表会
二階堂整2018「大分県のアスペクトの実態」科研報告書『大分県方言談話における対人配慮を中心とした世代差・地域差・性差の研究』

[付記] 調査にあたり、話者の紹介などで、次の先生方にお世話になった。記して感謝申し上げます次第である。別府大学 森脇茂秀先生 長崎大学 前田桂子先生 熊本大学 堀畑正臣先生 鹿児島大学 太田一郎先生 宮崎国際大学 相戸晴子先生
本研究は2018年度・2019年度福岡女学院大学学長裁量研究経費の助成によるものである。

(にかいどう) ひとし・福岡女学院大学人文学部教授)